

れなかった事柄がなかったのは、このハチソンを苦勞して翻訳し、さらに要約で努力したものを『月報』に載せることができたからだと思う。けだし、十分なスペースをとってもらえたので重要なことは一つも残さずくわしく述べることができた。

こうして60の手習いに弾みがついて次々と興味のある外国文献の勉強ができたことは、おそらく私の病後の精神を安定させ、体の調子にもいい影響を与えたことはまず間違いないところと思う。その意味でも『月報』のようなゆとりのある研究誌のあったことに心から感謝している。

(1988/7/10)

「ある」学会誌の危険な傾向

森 宏

筆者自身のくりごと

このところ日本市場に対する牛肉輸入の研究をしている。昨年夏ニュー・メキシコ州立大学で2ヶ月研究生活をおくり、成果をかねてからの共同研究者ゴーマンと連名で、ある学会誌に投稿した。レフェリー3人のうち1人は「前半部分を半分にけずればOK」、1人は「余り感心しない。いずれにせよ大幅にリオーガナイズの要あり」。問題は3人目で「これは、“アフター・ディナー・スピーチ”にはいるかもしれないが、いやしくも研究論文といえる代物ではない。」で、受理されなかった。

今年の春同大学で春休みの大半をすごし、長短、硬軟合わせて5本の論文を書いた。しかしエネルギーの中心は、昨年返された論文をデータの面でも、プレゼンテーションの面でも大幅に改善することにおいた。ただし結論は同じである。すなわち「輸入牛肉と国産牛肉とは同じ牛肉と言っても、かなり異質であるし代替性は小さい。従って自由化しても、輸入の増大は、輸入牛肉というサブ・マーケットのなかで伸びるにすぎない。日本の牛肉はアメリカの4倍高い、自由化したら牛肉(総)消費はたやすく4倍になり、国内生産(現在70%弱)がいまのままでも、輸入は10倍近くふえるだろう、という推測は現実的でない」というものである。

再び投稿したが、レフェリーの真中の1人が新しくなり、かれは「この論文は1/3に圧縮できる」(筆者自身全く同感、ゴーマンは自分がよく知らないものだから、余分な説明が多い)で、書き直せであった。問題は今年の3番目のレフェリーである。彼を意識して新しい、異質なデータも加え、われわれとしては余分と思えるくらい理論的な推論を展開したつもり

があったが、この種のものはリサーチ・ペーパーとはいえない、学会誌の論文にはむかない。」で、バツであった。

編集者からは、「モデルを一新しない以上、再度提出してもアクセプトされるチャンスはない」とのアドバイスが付け加えられてきた。

感心できない過度な数学志向

10年以上前になるが、実兄がぐだんの学会誌をみて、「ずい分むづかしいことやってるんだなー、丸で数学の論文集じゃないか」とつぶやいたのを思い出す。彼は大学は機械、仕事は高分子関係で、工場の若い技術屋を集めて、数学の輪読会をやっていた。

どの号を開いてみても、大抵の論文ははじめに理論モデルがあり、それを数学的にいじくって、操作可能な形にもっていき、その過程でいくつもの非現実的な仮定をおく、“完全競争”、“一次同次”、“輸入品と国産品は同質・完全代替可能”などである。そして最後にちょっとデータをいれて、「さあーどうだ！」とくる、データの地道な吟味などは殆どやらない。

日本の牛肉市場の分析についていえば、本『月報』の次号でくわしく分析しているが、日本の農水省がわが国の牛肉の（代表的な）卸売価格として公表しているものは、東京市場の和牛の「上」の価格である。和牛の「上」の、国産牛全体に対する比率は6～7%で、その値動きは、2/3を占める乳用牛は無論のこと、和牛全体の動きともきわめて独立している。従って日本の牛肉を「一つの同質の商品」としてとらえ、その価格を和牛の「上」で代表させるのはきわめて乱暴である。

しかし「いい研究論文」にとって、そんなことは瑣末なことにすぎない。大事なことはモデルが理論的に*正しくかつ整合的で、望ましくは壮大であること（*たとえば消費者は効用極大化を目的とし、企業は利潤極大化云々）。その条件をみたしていないものは、「研究論文」ないし“ジャーナル・ペーパー”とみなすことはできない。

米国の大学は、一部の学科を除き、筆者が60年代半ばに留学した頃にくらべ、随分研究費が窮屈になっているようである。コンピューターの発達で、かなり大きな計算も瞬時に、殆どただに近いコストでできる。しかし地道なデータの収集には、足代も時間もかかる。牛肉や青果の世界などは、まず人間関係を築いていかないと、信用できるデータが集らない。

“パブリッシュ オア ペリッシュ”はいまでもきつい。そうなる若い研究者（とかれに名をつらねる正教授連）としては、一番安易な途を選ぶことになりやすい。すなわち数学的AND/ORコンピューターモデルである。そしてたまたまそのような「真の研究者」が、自分の結論とはちがう結論を導く論文のレフェリーに選ばれたとき、彼が一層声高に「こ

これは「ジャーナル ペーパー」ではない」とのたまわすのは、ごく自然であろう（それでもまだやる気の「ノン・リサーチャー」）。

新米編集員の弁

松 浦 利 明

「社研の編集をやれば、すこしはムラの事情もわかるだろう」と三輪所長が考えられたかどうかは知るよしもないが、あまり事情のみこめないまま、編集担当を引受けてしまった。まあ所員が百人を越す大所帯だから原稿集めという苦役はなかりとうたかをくくったのが失敗の始まり。この一年半、頭にあるのはただ原稿依頼のことであり、おかげで原稿をきちんと出して下さるのがイイ所員、こともなげにキャンセルされるのはワルイ所員という単細胞的価値判断が身にしみこんでしまった。とりわけ月報は毎月のことだから頭が痛い。その月報が300号を迎えるという。まずはその long, long patience に敬意を表したい。

ところで私のもといいた研究所にも「月報」があった。過去形になっているのは、この三月に四百何号かで幕を閉じたからである。この「月報」も創られた時の狙いは、内部の研究交流、とくに論文になる以前の問題意識を議論しあい、さらに成果についての相互批判を行うというものであったから、社研の場合と似ているかも知れない。変わっているのは、全所員が順番で編集を担当することであった。しかし時間の経過につれて、創業時の狙いとはかけ離れていったが、この点も社研月報の辿ったコースと似ている。

月報のこうした変化には様々な要因が作用していると思われるが、私にはどうも問題意識段階の議論というのが、口でいうほど易しくないという気がする。それに学問の分化の進展が、もっと狭い、密度の濃い場を選ばせるようになってきている。相互批判のほうも、日本的な話になってしまうが、狭い職場での人間生活を考えると理想どおりにはなかなか行かない。月報が個別論文中心になっていくのは、それなりに理由があるように思われるが、せめて研究会の討論とか書評的論稿を努めて掲載するという形で創業の精神を忘れないようにしたい。月報を続けるだけが編集担当の役目というのでは、植物人間を診ている医者と同様、少々淋しい気がする。

ものごと25年近くも続くと、たいてい空気化してしまう。月報がないという状態を想像してみることが、その活性化に役立つかもしれないが、逆に古女房ないし亭主がいなければ人生もう少し活性化すると信じているケースもあるから、一概にはいえない。